

## 指定討論(2)

村井 康典  
(岩手日報 元論説委員)

岩手日報元論説委員の村井と申します。災害文化研究会には研究者以外も参加しています。いわば一般市民の目で感じたことを話します。

北原糸子先生は、災害史の立場から死者はどう葬られてきたのかを中心に講演されました。3人のシンポジストは、今回の災害で生き残った方々をどう支えるかをテーマに発表されました。一見離れているように見えるのですが、実はこの組み立てには密接な関係があることに気づきました。

というのは、3.11の数カ月後に聞いた宗教学者の山折哲雄さんの講演を思い出したからです。山折さんは、今回の震災では人と人の絆が強調されているが、それだけでは足りない。もう一つの絆が必要だと言うのです。それは死者と生き残った人間との絆。これをきちんと育てなければ、生き残った者の「心の平安」は得られないと話されました。

現実はどうでしょう。手前みそになりますが、岩手日報のアンケートで考えてみます。震災で家族や親族を失った人が「強い悲嘆」を感じている割合は年を追うごとに減りました。

しかし、2019年は逆に増加したのです。回答を分析すると、悲しみがぶり返している人は経済的に生活が悪化し将来不安を抱えている人に多い傾向が分かりました。

時間とともに自分の気持ちに一定の区切りを付けた人も、苦しみが消えたわけではありません。現実の問題が出てくると、再び「心の平安」を失うところに、危惧を抱きます。

大槌町の吉祥寺の高橋住職は「震災で生き残った人を守っていかなければなりません」と強調しています。この言葉は、宗教者だけではなく、私たちが考えていかなければならない問題だと思います。



吉祥寺 高橋英悟住職